
Xmasの贈り物

紅玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Xmasの贈り物

【Nコード】

N3964D

【作者名】

紅玉

【あらすじ】

クリスマス時期にやって来た変なヤツ。ふてぶてしくて、マイペース。一言で言えば、傍若無人！！ヤツの目的は、誰かの願いを叶える事。果たして、願いは叶えられるのか！？

垣沼 明（かきぬま あかり）編 1

雪がはらはらと舞始めていた。明はダウンジャケットに手を入れ、道を歩いていていた。

寒さで鼻が少し赤くなっていた。

「雪か…」

灰色の空を見上げた。白い雪が空から降ってくる。

「おい！その赤っ鼻^{はなばな}」

明は誰かの声を聞き取った。辺りを見回す。誰もいない公園前。

「ん？」

明は、砂場の近くにある雪だるまを見つけた。

おかしい。

今、雪は降り始めたばかり。まだ積もってもいない。なのに、何故ここに雪だるま？

明はその雪だるまに近づいた。下から上まで眺める。雪でできているみたいだ。

「いたずら？」

「何がいたずらなんだ？」

また声がした。どうやらさっきの声は、聞き間違えではないらしい。

「誰？何処にいるの？」

再び辺りを見回すが、公園にいるのは、自分とこの雪だるまだけ。

他には誰もいない。

「ここだよ。ここ」

明は気づいた。この声は、すぐ近くだ。

そつ、それは自分の目の前からのように。でも、目の前は人ではなく、雪だるままだ。頭に一瞬、非現実的な事が浮かんた。

「まさか…ね」

雪だるまを見て、笑った。

「お前、鈍感だな」

声がした。さすがに段々、気味が悪くなってきた。

「おい」

雪だるまの手が拳がり、左右に揺れた。明はぎよっとして、後ずさる。

「やっと気付いたか？」

雪だるまは、手を振り続けている。

「しゃ、しゃべってる！！！」

明の顔は、蒼白となった。

「そう、見た目は雪だるまだが、オレはしゃべる。オレは、スノーマン。よろしくな」

雪だるまは、意気揚々としゃべっている。不気味だ。

「な、な、な」

明は何も言えず、口をパクパクさせている。

「オレは、お前の願いを叶えてやる。願い事を言ってみろ。たいていの事なら、叶えてやるぞ」

雪だるまが願いを叶える？雪だるまが…？

「普通、この時期ってサンタじゃない？何で雪だるまなのよ」

震えながらも、明はツツコんだ。

「サンタなんてえのは、願いなんて叶えちゃくれねえよ。夢とやら胸糞悪いもんを与えるだけさ」

あんたは、夢いっぱい体しているくせに夢がなさ過ぎだよ。と、

明は雪だるまの暴言にもツツコミを入れたかったが、何をされるかわからないので黙っていた。

「で、お前の願い事は？」

「…何でも叶えてくれるの？」

明は少し怖さを忘れ始め、興味を示し出した。

「たいていの事はなっ」

「恋愛は？」

「恋愛？」

雪だるまは、明を見上げた。

上から下まで一度眺める。

ショートカットの髪、その髪形のせいでそう見えるのか、少年のよ
うな顔立ち。

凹凸のない体にダウンジャケット、セーター、下は短パンにブーツ。
どうも、子供くさく感じる。

スノーマンは、「ふっ」と笑った。

「確かにそんなんじゃ、モテなさそうだな」

「それ、どういう意味!？」と、明はムツとした。

「胸もねえし、ガキくせえし、まず女つぽくねえ。ってか、お前ホントに女か？」

明はスノーマンの的を射たストレートな言葉に、自分の理性が切れる音が聞こえた。

「ガシ、ガシ!!」

明は何発もの蹴りをスノーマンに入れる。

「お、おい、やめろ!! 体が崩れる」

スノーマンは悲鳴を上げる。

「ちゃ、ちゃんと願い叶えてやつから、や、やめろ」

明は蹴るのをやめた。

スノーマンは急いで足跡がついた部分をなで、体を修復していた。

「あー、怖かった。体がなくなったら、戻るもんも戻れなくなっちゃう」と、スノーマンはぶつくさと呟きながら、体を撫でている。

「で、願いは、両想いになりたいんだろ。誰になりたいんだ？」

「高校の先輩」と、明は恥ずかしそうに答えた。

「は!?! お前、高校生だったの?! 中学生かと思ってたぜ!」

再び明は、足を振り上げようとした。

「わわわ…悪かった。謝るから!!」

慌ててスノーマンは、自分の非を認める。

「で、そいつの家は？」

「家？」

「知らないのか？」

明は首を横に振る。

「じゃあ、案内しろよ。そいつを見たいんだ」

明は目線を下に降ろした。

「歩くの？」

白い真ん丸な体は、直接地面についている。

「歩くよ。何で行けっただよ。そいつん家遠いのか？」

「このすぐ近く」

「じゃあ、平気じゃん。何の心配してんだ？」

「足」と、明はスノーマンの体の下を指差した。

「ん？ああ、あるぜ。そうじゃなきゃ、ここまで来れねえーもん」

スノーマンはそう言くと、歯を食いしばり、力み出した。すると、

「ポン！」といういい音ごとに赤い長靴の足が、片足ずつ飛び出してきた。

「ふう、今日も快調！！」

スノーマンは、爽やかに汗を拭う。

「さあ、案内しろ」

「う、うん」

明は公園を出て、さっき歩いていた道へと戻る。道沿いに並ぶ家の一つが、先輩の家なのだ。

しかし、後ろがどうも気になる。後ろをちらりとみる。

赤い長靴を履いた雪だるまが、自分の後に続いてテクテクと歩いている。

気持ち悪い。自分は、雪だるまの霊（そんなものに魂が宿っているのか？）にでもとり憑かれた気分だ。

テクテク…。

「まだか？」

「うん…」

テクテク…テクテク…。

「まだ？」

「もうちょっと」

テクテク… テクテク… テクテク…

「お前、歩くの鈍^{のろ}くねえ？」

「もう、着くよ」

明は一軒の家の前で、足を止めた。

「ここか？」

「うん」と、明は家を眺めながら頷く。

「じゃあ、インターホン押せ」

「え？」

明はスノーマンの突然の言葉に、振り向く。

「用もないのにできるわけじゃない！先輩が出て来て何て言えばいいのよ！！」

「それは何とでもなるだろ」

簡単な事のように言うスノーマンが、憎らしい。そして、この間抜け面がとくに。

「あんたもう一回、蹴り入れようか？」と、明はスノーマンを睨みつける。

「胸もない、ガキくさい、その上、乱暴者ときちやあ、叶う願いも叶わなそうだな」と、スノーマンは強気に出て来た。

「何であんたそんな…」

明は、「はっ」とした。ここは、先輩の家の前。だからこいつ…。

「オレが代わりにインターホン押してやるよ」と、スノーマンはテクテクインターホンの前へと移動する。

「だあーっ！！やめて！！」

明はスノーマンの体を掴み、急いでインターホンから引き離す。と同時に玄関の扉が開かれた。

「あれ？家に何か用ですか？」

見た目は、一言でいうと素朴。口調は穏和な印象を受ける。

「せ、先輩！？あ、あの」

明は思いがけない出来事に、どぎまぎする。

「いやあ、先輩の家ってここだったんですね」

「君は？」

「あ、こんな恰好じゃわかんないっすよね。ただでさえ、同じ学校ってだけで先輩はオレの事知らないのに話しかけちゃってスイマセン」

スノーマンは馴れ馴れしく、ペラペラと話し続ける。

「冬なのに、こんなの着てて暑いっすよ。あ！オレの事は、スノー

マンって呼んでください」と、スノーマンは枝の先に手袋をはめた手を差し出す。

「どうも」

男は怪しむ様子もなく、につこりと笑って握手を交わした。

「こいつは、オレの友達です」と、スノーマンは明の背中を押した。

「あ、あの、垣沼明です」と、明は顔を赤らめ、男の顔を見る。

「よろしく」と、男は手を差し出し、明は俯きながらその手に応える。

「先輩、オレ達と友達になってください!!!」

「いいよ」

スノーマンの突然の発言にも、男は快く受けた。

「やったな明!!!」

スノーマンは「ドン」と、明の背中を叩いた。棒切れでできている手のくせに意外と力が強く、痛かった。

「う、うん」

「あ、そういえば先輩これからお出かけですよね。邪魔しちゃってスイマセンね。それじゃあ、オレ達は今これでおいとまします」とスノーマンはにこつと笑うと、明の手を引っ張り、そそくさとその場から去った。

「う、嘘みた〜い!!!先輩と友達になっちゃった」

明は、まだ少し赤い頬をおさえる。

「どんなもんよ!恋つーのは、強引さが大事よ。しかし、あいつアホそうな奴だったな」

「アホって何よ!」

「だってよ、よくも知らない奴と簡単に友達になれんだぜ。絶対、騙されやすいタイプだな。まあ、実際にオレの正体騙せたけど」

「そこがいいのよ」と、明はポツと顔を赤らめる。

「ふーん。それよりもだ、何でお前、あいつと知り合いじゃねえーんだよ。友達からって、チンタラやつてる程オレは暇じゃねえんだぞ」と、スノーマンは腕組みをしながら、横目で明を睨みつける。

「そ、そんな事言われたって！でも、何度か言葉を交わした事くらいならあるもん！！」

「あいつの頭の中にお前がいなきや意味ねえだろ！」

「うつ…」

明はスノーマンの鋭い指摘に、何も言えなかった。

「まあ、でも急接近大作戦をこれから決行する！！」

「え？？」

明は、目をぱちくりさせた。

「オレに任せとけ」

スノーマンはニヤリと、不気味に笑った。

作戦1

相手に自分を印象づける。

作戦2

クリスマスに手づくりのプレゼントを渡そう！！

作戦3

そこで告っちゃおう!!

「…何これ、安易な感じがするんだけど…」

明はスノーマンの作戦に呆れていた。

「うつせえなあ、チンタラしてんのは嫌いなんだよ!! どうせなら、一気に自分のパッションを相手にぶつけて砕けちまえーってのがいいんだよ。あ、砕けちまったらダメか。作戦1は出来たと思って、とにかく、作戦2はやれよ。絶対、気持ち揺らぐぜ」

作戦1…ああ、あれだけ馴れ馴れしくして、突然友達になってくれて印象に残るよね。でも、雪だるまのあんたの方が印象に残っている気がする…。

「それで、お前は何ができる？」

「…」

明は顎に手を当て、思考を巡らせる。

「…」

明の眉間にシワが寄る。

「…」

「何もねえーんだな」

スノーマンは、苦笑いして首を捻る明を見る。

「じゃあ、マフラー作ろうぜ。オレ、教えてやれるし」

「私、不器用なんだけど…」

「その様子を見ればわかるよ」と、スノーマンは苦い顔をしたまま言った。

そして、明は緑と白の毛糸と編み物用の針を買い、スノーマンの

いる公園へと戻った。

「それじゃあ、簡単な編み方を教えてやるな。まずだなあ、こうして…こう」

手袋と枝の手なのに、器用に一列編み込んでしまった。

「わかったな？やってみろ」

手本を見せたスノーマンは、明に途中まで編んだ毛糸を渡す。明は見よう見真似に、針を動かす。

「…？」

上手く出来ない。あんな雪だるまの手でもできるのに…。

「そことそこをかけ違ってんだ。そこを抜かしてるぞ」と、スノーマンは間違えを指差し教える。

「え？こ、こうで、こう？」

明は、スノーマンに言われたところを確認しながら正していく。

「そう、そう。手つきはぶきつちよだけど、いい感じだぞ。やればできるんじゃないか？」

乱暴な口調だけど、誉められると素直に嬉しい。

「それを何度も繰り返していけばいいんだ。簡単だろ？」

「うん」と、明はこくりと頷く。

「あのさ、スノーマンって、何で人の願い事を叶えてくれるの？」

「それはだな、話せば長く…って、おい！口より手を動かせ！！そこ違うぞ」

「え？え？」

「ここだ。…クリスマスまで時間がない。今日からいつでも何処でも絶え間無く、マフラーを編むんだ」

そう言った後、スノーマンはいきなり自分の体に片手をズボツと突っ込んだ。

「ガサ、ゴン」

明はぎよつと目を丸くする。

「よつと！」

体から手を出すと、その手には赤い携帯電話が握りしめられていた。「今からメアドを教えてやる。それで、わかんないところを聞け」と、スノーマンは穴の開いたお腹を撫でながら言った。

「…う…ん」

二人は、アドレスを交換しあった。雪だるまとアドレスを交換するなんて…。明は、登録し終えた携帯を見つめた。

それから二人の二人三脚の日々が始まった。スノーマンと初めて会ってから1週間が過ぎ、2週間目へと突入。…ついにクリスマス前日。

「やった！出来たよ！！スツチー」

明は、出来たマフラーをスノーマンに見せる。

「目は粗いけど、それだけでできれば上出来だ」

スノーマンは腕を組み、ゆつくりとこくりと頷いた。

「あとは、先輩に渡すんだね。でも…貰ってくれるかな？」

「あいつに拒む理由はない」とスノーマンは、にっこりと笑った。そして、体に手をつ突っ込み、二枚のチケットを取出した。

「これでデートに誘え」

くしゃくしゃになったチケットを差し出す。明は、それを黙って受け取った。チケットは、ひんやりと冷たかった。

「デートに誘ってOKすればもう、願いが叶ったも同然だろ」

MISSION

マフラーを渡し、デートに誘え！！

「健闘を祈る！！」

スノーマンはびしつと敬礼し、明もつられて、敬礼をした。それは、それは互いに素晴らしい敬礼だったという…。

明は高鳴る心臓の鼓動をおさえながら、好きな人の家の前に立っていた。

スノーマンはこっそり影から、明を見守る。

「ピンポン」

インターホンを鳴らす。

「はい」という返事とともに、玄関の扉が開かれる。

「あ、明ちゃん」

先輩は、にこつと笑顔を向けてくれた。明はその笑顔に失神しそうになったが、ぐつと踏ん張り、言葉を口にしようと、口を開く。

「あ、あ、あの…わ、私、マフラー…」
文章になってない。今の明にとって、単語を並べるのがやっとだった。

明はサッと、手編みのマフラーを渡す。

「僕に？うわあ、ありがとう」

先輩は、マフラーを受け取ってくれた。

「あの、先輩！私、私…」

冬なのに、暑い。汗もかいている。

「私、先輩のこと好きなんです！！もも、もしよければ一緒にデ、デートしてくれませんか？」

スノーマンは明が告白までするとは、予想外だった。しかしこの時、グツと拳を握りしめていた。

「パッションをぶつけたーっ！！男らしいぞ、明！！！」

明は言ってしまったんだと、チケットを差し出している震える手を見つめる。

「…僕なんかでいいの？」

「へ？」

少しの沈黙が、明には長く感じられていた。駄目かと思った。でも、今、何か嬉しい事を言われたような…。

「あの…デートしてくれるんですか？」

「うん、こんな僕でいいんだったら」

明は、ポカーンと口を開けた。願いが叶ってしまった。

スノーマンが隠れていた方を向く。そこに、スノーマンの姿はなかった。

「スノーマン…」

明は呟いた。願いが叶ったから、消えてしまったんだ。願いが叶って嬉しいはずなのに、何だかちょっぴり寂しかった。

…ありがとう、スノーマン。

「あれ？でも、それって、有効期限切れてない？」

先輩は、手に持っている明のチケットを見て言った。

「えっ！？」

明は、急いで確認する。

「ああっ！！あーっ！！！！」

歩いていたスノーマンは、野良犬と出会った。見つめ合う二人（
？）。野良犬は片足を上げた。スノーマンの雪の体に湯気があがる。
「あつ！てめえ、引っ掛けるんじゃないやねえ！！溶けんだろ！！やめろ
！！！！」

垣沼明編・終

藍田 諒（あいだ りょう）編1

諒は、人気の少ない道を歩いていた。雪が少し積もっていて、靴に雪がついて足取りが重い。

諒は、冬が嫌いだった。寒いのは苦手だし、あの人が淋しそうな顔をするから。

「ちよいとそこのお兄さん」

諒の耳に、怪しげな声が聞こえた。諒は足を止め、辺りを見回してみた。

狭い路地の隙間に挟まるようにして、”それ”は居た。笑みを浮かべ、手招いている。だが、諒は見なかった事にして、再び歩き出した。

スタスタ…。

後をつけられている。

「ちよいと、お兄さん。無視すんなって」

何も聞こえない。諒は自分にそう言い聞かせ、足を速める。

スタタ…スタタ。

「待てよ！」

”それ”の口調が荒くなり始めた。諒は、走りだす。

スタタタタ…スタタタタ…。

早い！何であんなモノがこんなに早いんだ。

「待てって言っただろうがっ！！」

”それ”の腕がにゅうつと何メートルも伸び、「ガシッ！！」と諒

の襟首を捕まえた。

襟首をしつかり捕まえた腕は、もとの位置に戻り始める。

「よう」

諒の目の前に、雪だるまの顔が現れた。

「…な、何の用？それって、着ぐるみだよなあ？」

諒は、真っ青な顔をして雪だるまを見ていた。

「だったら、腕が伸びると思うか？」と、雪だるまは表情を変えずに言った。

諒は雪だるまの手から逃れようと、もがいた。その時、肘が雪だるまの顔に当たった。

「ボトツ」

雪だるまの頭が取れた。諒は頭を拾い上げ、体に乗せた。そして、その場から何事もなかったかのように去ろうとした。

「おい！ちよつと待てこらあつ！！人の首落としとして、謝んねえのかい！！しかも、ズレてんだよ！！」と、雪だるまは頭を押さえ、もとの位置に調節する。

「い、いや、悪いな」と、諒は顔をひきつらせながら、笑った。

「まったく…」と雪だるまは不機嫌そうにしていたが、気持ちを切り換え、

「オレは、スノーマンだ！！お前の願い事を叶えてやるぞ」と機嫌よく親指を立てて、グーのサインを作った。

「……」

諒はくるりと向きを変え、歩く。諒は伸びたスノーマンの腕によって、再び捕らえられた。

「叶えてやるって言ってんだから、ラッキーだと思えよ」と、スノーマンは諒を睨みつける。

「い、いや、いいよ」と諒は断るが、

「で、どんな願いを叶えてほしい？ラッキーボーイ」と、スノーマンはお構いなしに話しを進める。

「はぁ…。願い？願いねえ…」

諒は溜め息をついた。どうやら、抵抗する事を諦めたようだ。

諒は、遠い目をする。

あの人の事が頭に浮かぶ。

あの人の笑顔が見たい。

本当の笑顔が。

「…願いつてのは、どんなものまで叶えられるんだ？」

「たいていの事なら、叶えられるぞ」

「俺、大切な人の笑顔が見たい。しばらく、見てないんだ。その人が見せるのは、俺を氣遣った笑いだけ」

「ふうーん、何か訳ありみたいだな。じゃあ、そいつの処に案内しろ」

「えー？あんたを会わせるのか？！」と諒は、露骨に嫌そうな顔をした。

「当たり前だろ。どうしたら、笑顔が見れるか対策を練らなくちゃだろ？その為には、本人を見とかなきゃだろ」

「どんな理屈だよそれ。俺、あんたと町中歩きたくないんだけど」

「は！？お前こそ、何なんだよ！オレは、可哀相な嫌われ者か？！そうなのか？こんな可愛らしい姿なのに？」と、スノーマンの顔が迫る。

「…わ、わかった。案内するよ」

行き交う人々が、振り返る。諒は、ちらりと隣を見た。スノーマンが、テクテクと歩いている。

「俺、本当にラッキーボーイ？」と諒は苦笑いをして、呟いた。しばらく歩くと、白い大きな建物に出くわした。

「総合病院？」と、スノーマンは門に取り付けられている名前のプレートを見る。

「行くぞ」

諒は立ち止まっているスノーマンに、中庭から声をかけた。スノーマンは、急いでスタスタと諒に駆け寄った。

中に入ると、待ち合い室はがらんとしていた。たまに行き交う看護師と医師の靴音だけが、病院内に響いていた。

「205号室だよ」と諒はスノーマンに言い、階段を上り、病室へ向かった。

「藍田加代子？」

スノーマンは、205号室の名前を見た。

「俺の母さんだ」と諒は言い、病室のドアを開けた。

「あら、諒ちゃん」

諒の母親は、弱々しく笑う。

「どう？具合は」と、諒は母親の側に寄る。

「ええ、いつも通り。変わりなしよ」

「そう」

変わりなしって事は、良くはなっていない。

「あら？今日は、可愛らしいお連れがいるのね」

「あ…どうも、スノーマンです」

スノーマンは、ぺこりと頭を下げる。何故か、元気がない。

「はじめまして。諒の母です」と、諒の母は丁寧に頭を下げた。

「諒と仲良くしてくれてありがとう。この子、無愛想だから、友達があまりいないの」と、母親は諒を見る。

「いえ、いえ、諒さんには僕のがままにお付き合い頂き…」

スノーマンは、ぺこり、ぺこりと頭を下げる。

諒はふと、ある事に気がついた。

「母さん、今日は顔を見に來ただけなんだ。こいつを無理矢理付き合わせちゃったから、そろそろ行くな。何か、來たばかりなのにごめん」と、諒はすまなそうに笑った。

「いいのよ。スノーマンさん、今日は來てくれてありがとうございます」

「いえ、いえ、なんの、なんの」

「じゃあ」

諒はスノーマンの手を引つ張りながら、急いで病院から出た。

「な、何だよ！そんなにオレを母親に会わせたくなかったのか?!」と、引きずられるようにして出て來たスノーマンは、顔を歪める。

「違う。自分の体を見る！」

「ん？」

目線を落とす。体から雫がポタポタと流れ落ちている。

「と、溶けてるーっ!!!」

スノーマンは急いで雪が寄せ集めてあつた所へ駆け、せつせと雪を体に塗りたくった。

「病院は、暖かくしてあるからな」と、諒はスノーマンの必死な様子を見つめながら言う。

「死ぬーっ！オレ死んじゃうよー」

スノーマンは半ベソをかきながら、雪を塗りたくり続ける。

「おい、その辺でいいんじゃないか？何か、会った時より太めになつてるぞ」

「いいんだよ、その方が！溶けにくくしてんの！！オレは、死にたくないのお！！」

「あつそ」

「で、あの人の笑顔をみたいんだな」

「ああ」

「じゃあ、あの人の好きなものって何なんだ？」

「好きなもの……」

諒は、病院の中庭にある木を見た。

「桜だよ」

「桜？」と、スノーマンも木に目をやる。

「季節じゃねえな」と、スノーマンは呟く。

「母さんは、2回目の春にはもたないだろうって、医者に言われてんだ。来年がその2回目。だから、悲しそうな顔をしていつも冬空を眺めている。冬は、嫌いだよ」と、諒は笑った。

「冬が来なきゃ、春は来ないぞ」

スノーマンは、真面目な顔をして言った。

「まあ、オレに任せとけ。桜もいいが、冬の花を見せてやるよ」

「冬の花？」

「……で、何で俺達スーパ―来てんの？」

諒は訳がわからず、何かを探すスノーマンの後ろ姿を見ている事だけしか出来なかった。

「ん？ああ……」

スノーマンは、諒の話を聞いてはいないようで、適当に相槌を打つ。

「……お前、人の話を聞けよ」

「ああ、うん」

「……聞いてないな」

「うん」

諒は「ボカツ」と、スノーマンの頭を一発殴った。

「何すんだてめえ！」

スノーマンは諒を睨みつけ、殴られた頭をおさえる。

「ん？あーっ！！頭、へこんでんじゃんかよ！！」

スノーマンはへこんだ部分を撫でて、修復する。

「オレが何をしたってんだよー」と、スノーマンは半べそをかく。
諒はそんなスノーマンを見て、罪悪感が芽生えた。

「ご、ごめん、つい…」

「ついとかうつかりで、済まされない事もあんだぞ！」
スノーマンは号泣しながら、諒に詰め寄る。

「わ、悪かったって。本当にごめんな」

「オレの何処が嫌いなんだ！？オレは、可愛い雪だるまちゃんだぞ
！！」

「嫌いじゃないよ…マジで…いや、本当に」

「…おっ！こんな所にお目当ての物が」とスノーマンは、諒の後ろにあつた探し物を見つけた。この時諒は、スノーマンにもう一発入れたいと思った。

諒とスノーマンが出会つた今日は、クリスマスだった。

諒はスーパーを出た後、スノーマンと別れて母親の為に淡い桃色のシヨールを買った。桜の色に似ている。きっと喜んでくれるだろうと、病院へ向かった。

「母さん、クリスマスプレゼント」と、諒は母親にさっき買ったシヨールを渡した。

「ありがとう。まあ、綺麗な色。私は、あなたに何も用意してないわ。ごめんなさいね」と、母親はすまなそうに俯く。

「いいよ。俺へのクリスマスプレゼントは、母さんが元気になる事。いい？」と諒は、笑った。

「そうそう、クリスマスプレゼントと言えばスノーマンからもあるらしいんだ」

「あの可愛いらしいお友達？」

「外が暗くなつてから、窓を見てほしいんだって」

「何かしら？」

「さあ？俺にもわからないよ」

「うつしやあつ！いい具合に空が暗くなってきたな。登るべー！」
スノーマンは風呂敷包みを袈裟懸けにし、病院の中庭の木を見上げた。そして、まるで猿のようにするすると登っていく。
調度いい太さの枝に立ち、諒の母親の病室の窓を探した。

「もうそろそろかな？」

諒は陽の光が入らなくなった部屋を見て、窓に近寄った。

窓からちようど中庭の木が見える。そこに、白いモノが見えた。

「母さん、ごめん。寒いだろうけど、窓開けるね」と、諒はベットの
上の母親に振り向く。

「お友達が何か見せてくれるんでしょ？駄目なんて言わないわよ」と
母親は、優しく応えた。

窓を開ける。冷たい風が部屋の中を通り抜けていく。諒は、スノーマンに手を振った。

「おお！あそこだな」

スノーマンも大きく手を振って、応える。

風呂敷包みを紐解くと、中から2本の赤い液体が入った瓶が出てきた。瓶に貼ってあるラベルには、イチゴシロップと書かれていた。

1本ずつ両手に持つと、イチゴシロップを口に含んだ。

「プーッ！！」

木に振り掛けるように、口から吹き出す。

「母さん、見てみなよ。桜だよ！」

諒は嬉しそうに、母親の方を向く。母親は不思議そうに、ベットから出て窓の側へと近寄る。

木は、真っ黒な空をバツクにキラキラとピンク色に輝いている。

「綺麗…」

母親の眼は、無邪気な子供のようにキラキラと輝いていた。その口元は自然に緩み、笑みが零れ落ちる。

風がふわっと流れ、木にキラキラと降り注ぐものを運んできた。

母親は、窓から手を伸ばしそれを受け取る。

「冷たい…。これ、雪だわ」と、母親は少し驚いたように、手の上で色付けされた雪が溶けるのをじっと見ていた。

「冬の花か…。雪だるまのあいつにしか出来ない事だな」と、諒は笑った。

「あら、諒ちゃんのそんな笑顔を見るの久しぶりだわ」

母親は諒の顔を見て、笑った。本当に笑顔無くしていたのは、諒だった。

諒は、木に目を戻す。すると、木の下に人々が集まっているのが見えた。みんな、木に降り注ぐピンクの雪を不思議そうに眺めている。

「はあ、はあ、はあ、そろそろ疲れてきたぞ。オレ、何かスマートになってきてるし。あんまし、スマートな雪だるまなんて可愛くないじゃん」

スノーマンは、息を切らせていた。

「あーっ、あれって、雪だるまあ？」

下を見下ろすと、小さな男の子が自分を指差している。

「え？嘘」

「本当だ。そうだよ。雪だるまだよ」

「誰があんな所に？」

「何か動いてない？」

人だかりがいつの間にか出来ている。どうやら、潮時のようだ。ちょうど、瓶の中味も空になった。

「おーい！そこのお前ら、オレを受け止めろ」

人々は雪だるまがしゃべった事に驚いてざわざわとしていたが、スノーマンはそんな事を気にする様子もなかった。

「今から飛び降りんぞ！ちゃんと受け止めてくんねえと、オレ粉々

になっからな！！お前らみんな人殺しになんぞー」と、スノーマンは合図もなしに木から飛び降りる。人々はとっさに、手を広げた。「ドサツー！！」

何人かは、スノーマンの下敷きになった。

「ふうー、ナイスだぜお前ら」

スノーマンは人を下敷きにしたまま、汗を拭う。そしてすくつと立ち上がると、人込みから出た。くるっと人々の方へ振り向くと、

「メリークリスマス！！」と笑って、駆け足でその場から去って行った。

人々は何が起きたのかわからず、寒い事も忘れ、しばらくその場に立ち尽くしていた。

「今日は、クリスマスね。去年の事を思い出すわ。スノーマン君が私たちに雪の桜を見せてくれたのよね」と、諒の母親はふふつと笑う。

「あの後、奇跡が起こったように母さん以外の人達も急に病気が回復の方に向かったんだよな。まさか、今年の春が迎えられてそのうえ、一時退院まで許されちゃったもんね」

諒は嬉しそうに、スノーマンの顔を思い浮かべながら笑う。

「でもあれ、桜の木じゃなかったのよ」

「え？」

諒は、きよんとする。

「桜の木はその隣。今年の桜見たくせに気付かなかったの？」

「そっいえば……」

俺が教えたのに……ちゃんと人の話し聞いてなかったな。

前の日に雨が降り、雪が溶けて寒さで凍結した道をスノーマンは歩いていた。

「オレはスノーマン 可愛いキャラクター みんなのアイドルさー」
「
歌っているスノーマンは、つるりと足を滑らした。すると、坂とな
っている道を勢いよく滑り行く。
「ギャーッ！！誰か止めてー！！！！オレ、どうしたらいいのぉっ」

藍田諒編・終

冬風 雪太（ふゆかぜ せった）編 1

ここは、日本にある普通の家。だが、住んでいる人は普通ではない。

今日は、クリスマスの朝。何やらこの家が騒々しい。

「はあ！？何でオレ、トナカイなんだよ！！」

雪太は、着ぐるみを頭からすっぽり被り、怒鳴っている。だから、迫力には欠ける。

「バカヤローっ！このご時世、不景気で金がなくて、トナカイが雇えねえんだよ！！」

サンタの衣装を身に纏った40後半から50代前半にかけたぐらいの男は煙草をくわえたまま、雪太に怒鳴り返した。渋めな感じの男だ。

彼は、雪太の父親である。

「あんたの稼ぎが悪いだけだろ！！ってか、オレが何であんたの手伝いしなきゃなんねえんだ？！」

「アホかお前は！サンタ業を継ぐ為の準備だろ！！」

「勝手に決めんじやねえ！！オレは継がねえよ！！」

「何だと！？てめえ、何が不満なんだ！」

「サンタがいなくなつてなあ、今時のガキは親からプレゼント貰うのよ。サンタからだつてな。だったら、サンタなんかいらねえだろ」

「馬鹿言え！サンタは、夢を与えんだよ。それにこの金色の粉を子供らに振り撒いて、来年も幸せな年が送れるようにしてやるんだ」
父親は、白い袋から金色の粉を出して見せた。

「それ、どうやって振り撒くんだよ。煙突は、今の時代ないぜ。しかも、ここ日本だし」と雪太が、鼻で笑うと父親は後ろに積んであるガラクタの山からフラフープを出した。

「大丈夫だ。タラララッタンツタン 通り抜けフープ」

「ドラ○もんのパクリかよ!!」

「それに夢を与えるってえなあ、そんなんであんた、よく言えるよ」
雪太は、トナカイの手で父親を指す。

「俺の何がいけねえんだ?」と、父親は自分の体を見る。

「普通、サンタってのはデブの人の良さそうな外人のおっさんだろ! ? なのにあんた悪人面で、引き締まった体。しかも、一見すると堅気な職人みてえな純和風テイスト。笑っちゃうね」

「サンタ協会に公認されりゃあ、誰だってサンタになれんだよ。それに顔がこんなんでも、俺の中は夢いっぱいだ!!」

父親は、胸を張って言う。

「よくもそんな恥ずかしい事を平気で言えるよ」と、雪太は呆れていた。

「とにかく、あんたに夢があるうとなかろうとオレは、サンタを継ぐ気はないし、サンタ業を手伝うつもりもないから。せいぜい、ガキ共に夢とやらを与えてくれ」

雪太はそう言うと、自分の部屋へと行ってしまった。

「あのガキヤア、親を馬鹿にしやがて!! 聖なる日に生まれた人間のくせに、人に夢と幸せを与えるって事がどんなに大切かわかつちやいねえ。思い知らせてやらなきゃな」と父親は、ニヤリと笑った。

次の日！。

「ギヤアーツ！！！」

雪太の悲鳴が家中に響き渡る。

「何じゃこりゃあ！！」

雪太は、自分の体を鏡に映す。そこに居るのは、丸い白い体の間抜け面。

「フッフ…どうだ雪太」

いつの間にか、煙草をくわえた父親が後ろに立っていた。

「親父！？あんたの仕業か！！」

雪太は、真ん丸になった黒い目玉で父親を睨みつける。

「サンタは何でも出来るんだ。俺からのクリスマスプレゼントだぞ。スノーボーイ」

父親は、意地悪そうに笑みを浮かべる。

「もとに戻せ！このクソ親父！！」

雪太は、まだ不慣れな体で父親に詰め寄る。

「10人の願い事を叶える事ができればもとの姿に戻るぞ」

「じゅ、10人だと！？」

雪太は丸い目玉をさらに丸くする。

「戻りたきゃあ、行って来い。あんまり文句垂れてつと、この穏和な俺も我慢ならなくなるぜ」と父親は笑顔で言うと、何処からかライフル銃を出し、雪太の丸い頭に突き付ける。

「風穴開けるぞ」

「……行きます」

「ジングルベル ジングルベル 鈴がなるー」

スノーマンは独り、公園のベンチに腰掛けていた。

「はあ……。あと1人だってえのに、なかなかチャンスねえなあ。こんな可愛いオレなのに、みんな逃げちまうんだもん。グッスン」

スノーマンがしょげていると、

「ニャー」と、猫の泣き声が聞こえた。

「ん？」

スノーマンが顔を上げると、目の前に一匹の三毛猫が居た。

「何だお前？オレを慰めてくれんのか？」

「ニャー」

猫は、スノーマンの言葉がわかっているかのように、もう一鳴きした。

「いい奴だなあ」とスノーマンは言うと、自分の体に手をつ込み、パツケージに入った煮干しを取出した。猫は驚いて、ビクとしていたが、

「ほらやるよ」とスノーマンに煮干しを差し出され、近づいた。

クンクンとにおいを嗅ぐ。一噛りしてみる。少しカチカチに凍っているが、噛むと味が滲み出てきておいしい。ガジガジと噛み始めて、煮干しを頬張る。

「あーっ！雪だるまー！！」

突然大きな声がし、猫とスノーマンはビクツとなる。

「ホントだあ」

子供が3人、スノーマンの方へ駆け寄る。

「わあーっ！すげえーっ！！雪だるまが動いてるー！！」

子供たちはスノーマンを見て、目を輝かせる。

「わっ！お前ら何処触ってんだ！！やめろ、いじるな！！形が崩れんだろ」

スノーマンは、子供たちに揉みくちやにされる。子供の一人がじつと、赤い長靴を見つめた後、片方を引っぱがすた。

「うわっ！何すんだ！！やめろーっ！！」

「ズドーン」

スノーマンの叫び声と共にその体はバランスを失い、地面に倒れる。
スノーマンは、ジタバタと残った片方の足と両手をばたつかせる。

「こっちも取ってやろうぜ」

子供は恐ろしい…。無邪気だからこそ。

「足がなーい！！歩けないっ！！」

子供たちが去った後、スノーマンは泣きながら叫ぶ。声は虚しく空に吸い込まれる。

「ニャー」

猫は心配そうに、スノーマンの顔を覗いた。

「ああ、オレって惨め…。この姿で何回、クリスマス過ごしてんだろ。あの時が17だったから…」

スノーマンは手袋の指を折り、数える。

「4回？今年で5回目かよ。高校に行かずに、20過ぎてもう、22になんのかよ。ありえねえー」

スノーマンは悲しくなり、泣き始めた。そこへ、

「雪だるまさん、どうしたの？」と、二つに髪を結わえた可愛らしい女の子が声をかけてきた。

「靴を奪われ、自分の呪われた運命に嘆いているんだよ、嬢ちゃん」とスノーマンは、泣きながら答える。女の子はスノーマンの足元を見ると、

「ちよっと待ってて」と言い、その場から去って行ってしまった。

数分が経った。

「…まだかなあ？」

スノーマンは、灰色の空を見上げる。雪が降り始めるなと思っていたと、小さな足音が聞こえてきた。

「お待たせ。雪だるまさん」

女の子は、にっこりと笑った。その手には、二足の雪用の真っ白な長靴が抱えられていた。

「これ、あげる。私ね、ずっと前、寒ーい処に居ただけど、ここ

に引越したの。ここはそこよりあんまり雪が積もんじゃないから、これ
いらないの。私の大きいお兄ちゃんの方の靴だからおつきいけど、
雪だるまさん履いてくれる？」

世の中にはこんなにすっかりしていて、いい子もいたんだなあとス
ノーマンは、女の子を見ながら思った。

「ありがとな。悪いけど、その長靴をオレの足元の方に、挿してく
んねえか？」

「いいよ」

女の子はぐいっと、長靴を雪の体に押し込む。

「ついでに手も貸してくれ」とスノーマンは言い、女の子はスノ
ーマンの手を取り、少しの力を貸した。

「ありがとう。お前には、幸福が訪れるぞ」

スノーマンは、優しく女の子の頭を撫でた。女の子はにっこりと、
微笑む。

「ニャー」

猫が一鳴きした。

「お前、まだ居たのか」とスノーマンは、猫を見る。

「可愛い」

女の子は、猫を撫でた。

「あれ？」

女の子は、猫の赤い色の首輪にぶら下がっているプラスチックで
きた円い物を見た。

「何か書いてあるよ。ミミ…。あとは読めないや」

スノーマンはどれどれと、首輪を見る。

「三丁目…。これ、住所だな。こいつ、迷子かも」

「かわいそう」と女の子は、猫を抱き抱える。

「ここからあんまし遠くないみたいだから、オレが家まで連れて行
つてやるよ」

「ニャー」と猫は、嬉しそうに鳴いた。

スノーマンは、倒れた時に落とした水色のバケツを拾うと、巻いていた黄色いマフラーをその中に入れた。

「ミミをこの中に入れてくれねえか？オレが抱いたら、こいつ凍え死んじゃうからな」

女の子は、猫をバケツにそっと入れた。

「ジングルベル ジングルベル 鈴が鳴るー っと」

少し歩いた先に、猫のミミの家はあった。

「ピンポーン」

インターホンを鳴らす。

「……」

誰も出て来ない。

「ピンポーン」

もう一度、鳴らす。

「……」

スノーマンは首はないので、頭を傾ける。

「ニャ？」

ミミも首を傾げる。

「あら、雪だるまさん。何か御用？」と、隣の家から40代くらいの女の子が出て来た。

スノーマンを見て、驚く様子はない。どうやら、着ぐるみを着ていると思っているらしい。

「このミミって猫を届けに来たんですけど」と、スノーマンはバケツに入ったミミを見せる。

「あらあ。可哀相ねえ、その人なら、引越してしまったわよ」

「引越し先、聞いてませんか？」

女の方はスノーマンに言われ、少し考えた後、腰に巻いていたエプロンのポケットから一枚の紙切れを取出した。

「これ、引越し先のメモよ。もう書き写してあるから、あなたにあげるわ」と、スノーマンは紙切れを貰い礼を言うと、テクテクと歩いて行つた。女の方はその後ろ姿を見送っていたが、「あらあ」と声を上げた。

スノーマンの丸みを帯びていた背中からは、何処かに倒れたかでもしたように、平らになっていた。

「この場所に行くには、電車に乗らなきゃだな」

スノーマンは、紙切れを見ながら呟いた。

「ニヤー」

「安心しろ。責任持つて、ちゃんとか家に届けてやるよ」

駅に着くと、体から赤いガマグチを出した。そこからお金を出し、切符を買うと、マフラーの中にミミを隠して電車に乗った。

ガタン、ガターン

1 駅。

ガタン、ガターン

2 駅。

「悪い、ミミ。限界だ」

周りの人々は、スノーマンを避けながら、目を丸くして見ている。スノーマンの体からは、雫がポタポタと流れ落ち、足元には水溜まりが出来ている。次の駅に着くと、ドアが開く前に駆けて飛び出そうとした。

だが、あまりにも慌て過ぎたのが悪かった。ドアが開けきつていなかった為、頭がドアにぶつかって、頭が少し変形した。それでも構わず、外に出た。

「頭が体がーっ!!」

スノーマンは、駅の外に前の雪が残って積み上げられていた場所へと飛び込む。その上に体をゴロゴロと転がす。

体のもとに戻ったところで立ち上がり、ある事に気がつく。

「目が！目が片方ない!!」

地面にはいつくばって探すが、見当たらない。

「雪だるまさん、どうしたの？」

男の子が声をかけてきた。

スノーマンはショックと焦りの為、言葉を口にする事が出来ない。泣きながら、ふるふると首を横に振る。

「元気だして」

男の子は、アーモンドチョコレートを雪だるまにあげ、去って行った。

今日は、何だか自分が余計に惨めに感じる。貰ったアーモンドチョコレートをじっと見つめた。

もしかしたら…。と、アーモンドチョコレートを無くなった目の場所に押し込む。

「見える…」

今さらながら、自分の体は何でもありだと思った。

「ニャー」

「悪いな。電車の中は、暖房がきいててムリなんだ。時間がかかるけど、歩いて行くぞ」と、スノーマンは猫に言う。

しばらく歩いた。もう、辺りも暗い。雪が降り始めていた。

「大降りになんな」と、スノーマンは段々と大きくなる雪の粒を見ながら、呟いた。

周りの家々には、暖かい明かりが点っている。スノーマンは、淋しそうな眼でそれを見つめた。

「ウニャーン」

猫はそんなスノーマンを察したのか、自分がここにいるよと鳴いたように聞こえた。

「煮干しまだあるぞ。くれてやる」と、スノーマンはバケツの中に残りの煮干しを入れた。

「早く家に届けてやるからな」

スノーマンは真面目な顔をして、さつきよりも足を速めた。

朝が明けるのは、早く感じた。猫はマフラーの中に潜り、丸まって眠っていた。スノーマンは眠気を抑え、歩き続けた。

多分この調子だと、着くには日が落ちている頃だろう。そんな事をぼーっとした頭で考えていると、ふと、ある事を思い出した。

今日は、12月24日。自分の誕生日だ。

「とうとう、22になっちまったよ」と、苦笑いした。あの父親のせいで、5回目のクリスマス。

いつになったら、もとに戻れるのだろうか？ずっと、この体のままなのか？

冬にはこうやって歩き廻れるが、夏は冷凍庫の中で夏眠状態。この体に慣れてしまった。そう感じる自分が恐ろしい。

今まで願いを叶えた9人の顔を思い出す。…あれ？でも、そんなに悪い事ばかりじゃなかったかも…。

「ここだな」やっと目的の場所に着いた。空は予想通り、暗くなっていた。紙切れを見て、確認する。間違いない。

「ピンポン」

インターホンを鳴らした。

「はい」

中から女の子の声がし、扉が開かれる。小学6年生くらいの女の子が出て来た。

「ニャーッ!!」

ミミは嬉しそうに、バケツから飛び降り、女の子のもとへ駆ける。

「ミミ!!」

女の子はしゃがみ込み、手を広げミミを受け止めた。

「会いたかったよお」と、女の子はミミのふわふわな毛に頬を擦り寄せる。スノーマンは、その光景に自分の口元が緩んでいる事に気がつかなかった。

女の子はミミを抱いたまま立ち上がり、スノーマンに向かって微笑んだ。

「ありがとう。白髪はくはつの天使さん」

スノーマンはこの時、自分の胸が暖かくなるのを感じた。幸せを与えるのも悪くないなど、ちよっぴり思った。そして、笑顔になった。

「メリークリスマス」

「あー、見てママ！！真っ白な人だ！教会にいる天使さんみたいだよ」

スノーマンは、親子連れとすれ違った。何を指しているのだろうと振り返る。

「本当ね」と母親は、につこりと笑っている。だが、辺りにはその親子と自分しかいない。しかも、自分の方を見ているような…。

スノーマンは、近くの家の窓に自分の姿を映した。

何故だか生まれた時から真っ白な髪、母親譲りの青い瞳、男の割りには、白い肌。真っ白な洋服を着た男が目の前に映っていた。

「オレ…もとに戻ってる…？」

何でもとに戻っているとかそんなの気にならなかった。ただ、嬉しかった。

「やったー！！」

ガッツポーズをし、思わず星が煌めく空に向かって叫んだ。

「バカヤロー！近所迷惑だ！！」

「あ…す、すいません…」

もしかしたら、サンタと一緒に白髪の天使があなたのもとへ幸福の金色の粉を振り撒きにやって来るかもしれません。皆さんに幸福が訪れるますように。

「Merry Christmas!」

冬風雪太編・終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3964d/>

Xmasの贈り物

2010年11月29日09時12分発行